

## 第十一章 忍者の襲撃

一方、ある妬み深い老婆の茶屋が忍者らに会いました。「あのよそから来た茶道家は、お客を横取りするんです！消して欲しいんです！」と言いました。

忍者の長は「そうですか。どんな手立てがいいでしょう？」と聞きました。

茶屋は「どんな手立てでも構いません」と答えて、去りました。

長は側近に「あの茶道家について何か知っているか？」と聞きました。

側近は「数週間前、この町に来ました。温泉で働いています。そして毎晩、城に行きます。若殿は彼女について興味があるそうです。隣にあった国の前の大名の娘かも知れないそうです」と答えました。

「面白い。隣の国の大名も、彼女について興味があるかな。じゃ、娘を今からここに連れてきて、大名に使者を派遣しろ」と長は言いました。

「はっ、長、仰せの通りにいたします」と側近は言って、出かけました。

その夜、ゆきが温泉へ帰る間、忍者はゆきを素早く取り囲んで、猿轡をかませて、手足を縛りました。揉みあっている間に、毛の腕飾りは切れて、地面に落ちてしまいました。

側近はゆきを長のもとへ手足を縛ったまま連れて行きました。「この娘が茶道家です」と言いました。

長は「そうか。若すぎるな。本当に上手かな。この娘の茶の湯を見てみたい。束縛を解いて」と言いました。

猿轡が外されてから、「助けて助けて助けて」とゆきは叫びましたが、狐の毛がないので、何事も起こりませんでした。

「この付近では、いくら叫んでも、誰も助けにはこない」と長は言いました。「一服立ててくれ」

しかたなくゆきはお手前を始めました。終わった後で「本当に上手だぞ。大名の興味があれば、俺はお前を芸者にするつもりだ」と長は言いました。

「めっそもございませぬ」とゆきは言いました。

「この娘を牢に連れて行って、そこに閉じ込めておけ」と長は言いました。

牢に閉じ込められてから、ゆきは泣きながら眠ってしまいました。